

文殊山の山ん姥 (南井町)

片上地区の北の方には、文殊山というお山がそびえている。この文殊山の頂上から、南井町へ少し下りた所に、大きな岩が一つある。その岩穴は、中の広さが三畳ほどもあり、日中でもうつつすらと暗い。この岩穴は、「山ん姥の大岩穴」という、おそろしい名前がつけられている。

むかしむかし、文殊山には、山ん姥が住んでいるといううわさがあつて、山のふもとの南井の村のもんも、この山には、おそろしがって近よらなんだんや。ほやけど、山ん姥の姿を見たもんは、だれもえんかつたんや。

十月はじめのある日のことや。秋の刈り入れも終わつて、村のお祭りの日のことや。神社には、のぼりが立ち、ドンドコドン、ピーヒャラーと、はやしの音も

にぎやかになつて、村のもん、老いも若きも みんなうきうきや。

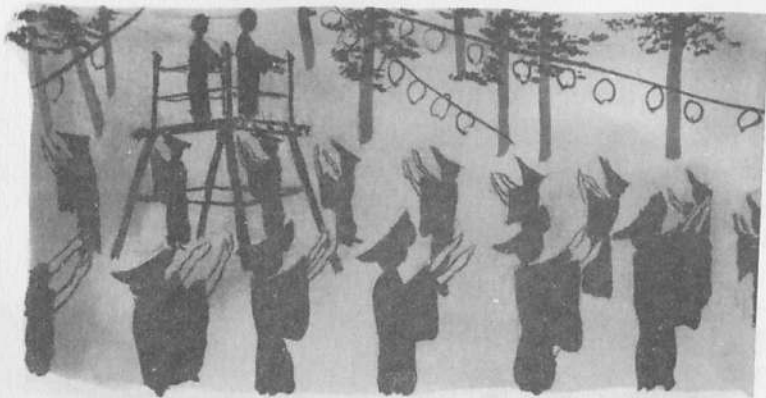
子どもは ええべべ着せてもろて、はねまわつておつた。村のもんみんな 踊りに浮かれていた時、

「みんな、たいへんやー、たいへんやぎー。」と、ただならぬ声。

みんなが踊りをやめて 声のする方を見ると、吾助どの嫁が、神社の階段を 息を切つてかけのぼつてくるではないか。

「何や お杉さんでねえか。どうしたんや。」

「どうしたも こうしたも ひどいこつちや。祭りのごつおが気になつて、ちよつと うちにもどつてみたら、こわ飯も すしも にしめも すっからかんにのうなつてゐるんや。なべん中、からっぽやー。」





村のもんみんな うす気味悪なつて、うちに走
つて見に行つた。

ほしたらや、三吉さんとも、弥八さんとも、
牛松さんとも、門兵衛さんとも、同じ手口で
やられていたんや。お膳はひつくり返され、お釜は
土間に投げ出され、白いままつぶが 散らばつてこぼ
れていた。人が 食い散らかした様子とは思えんような
荒らされかたやつた。

せつかくの 楽しいお祭り気分も、このことで、いっぺんに
消しとんでしもた。

わけがわからんままに、しばらくたつた ある朝のことや。村のはずれに住む
与平さんと、甚平さんとこの米倉が、何ものかに荒らされた。

「一年分の米が、一夜のうちに のうなつてもた。わしら、あしたから どうした
らしいんじや。」

与平さんは、へなへな地べたに座り込んでしもた。甚平さんは、この間 嫁さんを
なくして、気落ちしていたやさきに、またまた かわいそうなことになつてもて、
みんな ひどう気の毒がつて なくさめようもなかつた。

その後も、うす気味悪い出来事が、続けて起こつた。あつちのうち、こつちのう
ちと 食いもんがのうなつた。牛や にわとりまで いなくなつた。

村人中は すつかり元気がのうなつてもた。子どもたちは 外で遊ばんようにな
つたし、おとなも おどおどしていた。

それから、何日かたつた ある月夜の晩のことやつた。弥七さんここでは、みん
な はようから 床に入っていた。弥七さんは、なかなか 寝られんかつたんやけ
ど、子どもたちのいびきを聞いているうちに、まぶたが重うなつてきて うとうと
したした。

どれくらい 時間が たつたかのう。

「ガツ、ガツ。グチャツ、グチャツ。」

何か、へんな音がするんや。

「こんな 真夜中に 何やろ。」

と、弥七さんは 寝ぼけまなこの目をこすつて、耳をそばだてると、そのへんな音は、どうも、隣の流しの方から聞こえてくる。

不審に思った弥七さんは、そうつと起き上がり、しろうじの戸のすき間から、のぞいてみた。

するとや、何と、黒い、いけけだものが、流しのまん中に うずくまっているんや。弥七さんは、おどろして 思わず助けをよばろうかとしたんやけど、やつとのことでこらえて、ぶるぶるふるえながら見とつたんや。

月の光が、その化け物を 照らし出した。

そしたら、その化け物の、おどろしいこと。



黒髪ふりみだし、口は、耳元までさげ、目ん玉は、たき火みたいにかツカツ燃えてる。ほして、その化け物は、米びつのごはんは、むしゃぶりついているんや。に
よきつと のびた牙が、おひつに ガツガツあたるんや。

山ん姥や！

弥七さんは 息が止まりそうやった。

山ん姥は、空っぽになった米びつを けっころばし、なおも あたりのなべを、べろんべろんなめ回し、それから 米の入ったかますを 三つほど わけものうかつくと、風のように 走り去っていったんや。

村中 大きわぎになった。

「弥七どんが、山んばを見たんやと。」

「今までの 食いもん荒らしも、ぜんぶ 文殊山の山ん姥のしわざやったんやな。」

「今に、食いもんがのうなつて、わしら、うえ死にやぞ。」

「山ん姥は、きつと 子どもまで食べるぞ。」

村の者は、みんな、どうしよう、こうしようと相談した。

「いくら、相手は、おどろしい化け物とゆうても、わしら、泣き寝入りはできんどのう。」

「わしら、命をかけて、山姥を退治しようぞ。村を守ろうぞ。」

ということになって、村の男ども総出で、山姥を退治することに決まった。

竹のやり、こん棒、すき、くわ、なた などをもち、頭には なべをかぶり、す

ごいいでたちをした百姓どもは、庄屋さんを先頭に、山姥の住む山の中に、入つて行つた。

村の男どもは、うっそうと おい茂つた山の中を、どんどん進んで行つた。

歩いてても 歩いてても 森や。いくら行つても 山姥の住んでい

る所には着かん。そのうち うす暗うなってきたんやけど、のりかかった舟や。もどるわけにもいかないので、たい松をともして つき進んで行つた。



すると、ついに いけい岩穴にぶつかった。これが、山姥の住みかやつた。この穴の、いけえこと いけえこと。

村のもんは、しんとして 中の様子をうかがつた。

大岩の中からは、ふうつ、ふうつと、生ぐさいにおいが、ただよ

つてくる。どうも、山姥は ねているらしい。

村のもんは、気をふるい立たせて、

「山姥めー、出てくされー。」

わしらの食いもん、かえせー。」

と、いつせいに 声をはり上げて どなった。

すると、大岩の穴の中から 山姥が、ニヨッキリ、出てきた。

まあ、とてつものう いけえ化けもんやつた。村のもんらは、一瞬 たじたと

なつた。



山姥は、牛や にわとりを飲みこんだらしく、血なまぐさいにおいを 村の者に、ふうつと 吐きかけ、ぎろつと 燃える目で ならみつけた。



姥は、髪をふりみだし、目を、カツカツ燃や
したまんま、山の奥の奥へ 逃げて行ってし
もうた。

村のもんは 肩を抱きおうて 喜び合った。

そして、おそろおそろ、山ん姥の大岩穴に
入ってみると、その穴の中は、山ん姥の生ぐ
さいにおいでムンムンしていた。

でも、穴の中には、村から盗んでいった米
の俵もいっぱい積んであったし、豆やもちや
いもの食いもんなども、たんと、ためてあつ
た。弥七どんとこの、三つのかますも、まだ
そのままあつた。

それからというもの、南井の村には、山ん
姥は出んようになったんや。おしまい。

庄屋さんは、腰が抜けてしまいそうなほど ガチガチしたけど、りきんで、
「村の衆、かかれえー」
と、命令を下した。百姓どもは、ハツとして、気がいみたいい やみくもに
「わーっ。わーっ」
と、大声をあげて 山ん姥に つつかかって行った。

山ん姥に、竹やりをさし、すきや、くわで なぐりかかった。ある者は なべを
かぶつた頭で、山ん姥のすねに ずずきをくらわした。

山ん姥は、

「ウオーツ、ガオーツ」

と、地ひびきするようになり声を上げて、ズシン、ズシンと 暴れた。

けど、村のもんは、死ぬ覚悟やったから、どんなに 山ん姥がおどろしくても、
逃げるもんは、一人もおらん。みんな 力を合わせて 立ち向かった。投げられて
も、ふんづけられても、がむしやらに かぶりついていった。

この、しつこい攻めに、山ん姥は、どうとう、いたたまれんようになった。山ん